

『千載館抄書』所収『鎌倉右府家集抄出』の本文について

——真淵評語本『金槐和歌集』の抜粹諸系統の所拠本文に関する報告——

犬井善壽

へ ー へ

学習院大学図書館蔵『千載館抄書』全十四冊の第十四冊に、『鎌倉右府家集抄出』と題される源実朝の家集が収められている。『国書総目録』の『金槐和歌集』の項に、写本として、『学習院（抄書の内）』と掲げられており、『抄書』の項に、所収書として、『金槐集』と掲げられている書である。

『国書総目録』の記載に拠れば、この書は『金槐和歌集』の普通見られる伝本のごとくであるが、実は、

抄出

鎌倉右府家集 金槐和歌集と云 上中下三冊

と、内題の右側に「抄出」という語が書き添えられていることから判るように、『金槐和歌集』から歌を三十五首抄出・抜粹したものである。その内題の次の行には、

寶曆五年三月 賀茂真淵序辞並評有

とある。

『金槐和歌集』の管見に入った諸伝本は、所載歌・部類・配列・詞書と歌の本文等の大幅な相違、つまり著性本文形成の相違に拠って、大別二系統に分類でき、その二系統は、その本文の小規模な差異、つまり書写性本文変化に拠って、それぞれ更に幾つかの系列に細分できる。それを整理して示すと、

定家所伝本系統 定家所伝本系列 藤原定家所伝本・函館市立図書館本

松平文庫本系列 島原図書館蔵松平文庫本・内閣文庫（二〇一・四五五）本等

群書類従本系列 群書類従版行本・犬井架蔵写本

柳宮重槐本系統 貞享四年版行本（伝本多数。真淵評語書入版行本を含む）

貞享版行本系列 秋田県立図書館本・宮城県図書館蔵伊達文庫（二八四・一二）本等

真淵評語本系列 茨城大学附属図書館蔵菅文庫本・犬井架蔵上巻残欠本等

中川文庫本系列 祐徳稲荷神社寄託中川文庫本・高松宮家旧蔵本等

である。また、柳宮重槐本系統真淵評語本系列からの抜粋本文を有する、

金槐和歌集秀逸 西尾市岩瀬文庫本・東海大学附属図書館蔵「叫芳亭叢書」所収本

金槐和歌集佳調抜 大分県立図書館蔵「碩田叢史」所収本

鎌倉右大臣家集中抜粋 岩波文庫『金槐和歌集』所収 三輪田高房蔵本

も、本稿において検討を加える『千載館抄書』所収『鎌倉右府家集抄出』も、それらの大幅な抜粋を著性本文形成と認定して、抜粋諸系統として、それぞれ一つの系統と見るのが妥当である、と稿者は考えている。

『鎌倉右府家集抄出』は、柳宮重槐本系統真淵評語本系列の中の、それも、宝暦五年（一七五五）三月の賀茂真淵の序を持つ写本もしくは真淵の評語を書き入れた貞享四年版行本から、歌を抜粋したものである。

この書は、これまで、『金槐和歌集』の研究において、本文批判としても作品批評としても、取り上げられた

ことがなく、その伝存すら殆んど注目されていない。今述べたとおり柳営垂槐本系統本文からの抜粋本ではあるが、本稿において、この書の紹介の意味を併せて、その本文について、『金槐和歌集』諸伝本の本文と細部にわたって比較吟味し、柳営垂槐本系統本文との関連、あるいは、真淵評語本系列本文との関連を検討し、『金槐和歌集』における柳営垂槐本系統からの抜粋の実態についての稿者の調査と検討の一端を示すことにする。

なお、『金槐和歌集』の管見諸伝本の呼称は、所蔵者を示す略称を以てし、二度目以降は簡略な略称とする。

まず、その『鎌倉右府家集抄出』の本文を紹介し、各歌のこの書における通し番号を私に付す（濁点、稿者）：
 なお、各歌の下方に、柳営垂槐本系統貞享四年版行本と定家所伝本系統との歌番号を添える。

「抄書」のこの巻の外題・内題および目録中の題名は、

外題 抄書 十四

（題箋、表紙左上）

内題 千載館抄書 十四 目録

（本冊の巻頭）

題名 金槐集

（本冊巻頭の目録中の題名）

であり、前述のこの書の内題は、

抄出

内題 鎌倉右府家集 金槐和歌集と云 上中下三冊

寶暦五年三月 賀茂真淵序辞並評有

である。続いて、春の歌三首から本文が始まる。詞書は示されていない。

一 今朝見れば山もかすみて久方の天の原より春は来にけり

（柳営本番号・定家本番号）
 （柳営 一・定家 一）

二 木のもとにやどりをすればかたしきの我衣手に花はちりつ、

（柳営 六一・定家 五三）

三 山風の桜ふきまきく音すなりよしの、山のいはもとゝろに

（柳営 七六・定家 七）

次の二首が、夏の歌、

四 山ちかく家ゐしをれば郭公なくはつこゑを我のみぞきく
五 さみだれの露もまだひぬ奥山の槇の葉がくれ鳴郭公
続く六首が、秋の歌、

(柳営一四三・定家一二四)
(柳営一五三・定家一三六)

六 天河みなわさかまき行水のはやくも秋の立にけるかな

(柳営一九二・定家一六四)

七 夕さればいなばのなびく秋風に空とぶかりのこゑもかなしや

(柳営二二三・定家二二七)

八 天原ふりさけ見れば十寸鏡きよき月夜に尸なきわたる

(柳営二二九・定家二一七)

九 浅茅原主なき宿の庭の面にあはれいくよの月はすみけむ

(柳営二七五・定家五六〇)

一〇 久堅の月の光し清ければ秋のなかばを空にしるかな

(柳営二八六・定家二一二)

一一 よを寒みね覚て聞ば長月の有明の月に衣うつなり

(柳営二八九・定家二四七)

続く三首が、冬の歌である。

一二 ものゝふのやなみつくろふ小手の上に蔽たばしるなすの篠原

(柳営三四八・定家 不載)

一三 山里は冬こそ殊にわびしけれ雪ふみ分てとふ人もなし

(柳営三七三・定家三二六)

一四 ものゝふの八十氏川を行水のながれて早き年のくれかな

(柳営四〇〇・定家三四三)

恋の歌は、二首のみである。

一五 恨わびまたじとおもふ夕だになほ山のはに月はいでけり

(柳営五二〇・定家 不載)

一六 ほとゝぎすなくや五月のさみだれのはれず物思ふ頃にも有かな

(柳営五二八・定家三九八)

残る十九首は、旅歌で恋歌・旅歌で四季歌・旅歌・無常歌・述懐歌・賀歌などと続くが、雑歌と把握できる。

一七 旅衣袂かたしきこよひもや草の枕にわれひとりねむ

(柳営五六七・定家五一四)

(け)二重ネル)

一八 旅衣うらかなしかる夕ぐれのスそのゝ露に秋風ぞふく

(柳営五七五・定家五一七)

一九 秋もはや末野の原になく鹿のこゑ聞時ぞ旅はかなしき

(柳営五七七・定家五一九)

- 二〇 箱根路をわがこえくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ
 (柳営五九三・定家六三九)
- 二一 こむとしもたのめぬうはの空にだに秋風吹ば鴈は来にけり
 (柳営六〇五・定家四二五)
- 二二 今こむとたのめし人は見えなくに秋風さむみ鴈はきにけり
 (柳営六〇六・定家四二六)
- 二三 世中は鏡にうつるかげにあれや在にもあらずなきにもあらず
 (柳営六五三・定家六一四)
- 二四 神といひ仏といふも世中の人のこゝろの外のかは
 (柳営六五四・定家六一八)
- 二五 萬代に見るともあかじ長月の有明の月のあらん限りは
 (柳営六七三・定家三六七)
- 二六 山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心我あらめやも
 (柳営六八〇・定家六六三)
- 二七 ひむがしの国にわがをれば朝日さすはこやの山のかけとなりなき
 (柳営六八一・定家六六二)

ぞ

- 二八 おもひ出てよるはすがらにねを・なく有しむかしの世々の古事
 (柳営六八三・定家五九六)

(なて「二重ネル」)

- 二九 中々に老ははれてもわすれなでなにと昔をいとしのぶらむ
 (柳営六八四・定家五九七)
- 三〇 世にふればうきことのはの数ごとにたえず涙の露ぞ置ける
 (柳営六八七・定家六〇二)
- 三一 年ふりは老ぞたふれて朽ぬべき身は住の江の松ならなくに
 (柳営六九二・定家五八八)
- 三二 空蟬の世は夢なれや桜花咲ては散りぬあはれいつまで
 (柳営七〇八・定家五四九)
- 三三 かくてのみありてはかなき世中をうしとやいはむあはれとやいはむ
 (柳営七一・定家六〇九)
- 三四 とにかくにあれば有ける世にしあればなしともなき世をもふるかも
 (柳営七二三・定家六一一)
- 三五 とにかくにあなさだめなき世中やよろこぶものあればわぶるもの有
 (柳営七二四・定家六二〇)

以上の三十五首が、この『鎌倉石府家集抄出』所載の歌である。

へ 二 へ

この書の内題の「鎌倉右府家集」という書名は、下方に「金槐和歌集と云」と注記が添えてあるが、この書名を持つ『金槐和歌集』の伝本は管見に入らない。貞享四年版行本の外題は、印刷題箋に示されるものは「鎌倉右大臣家集」であり、この系統諸本の写本の中で「鎌倉右大臣家集」と外題あるいは内題に題する本は、秋田県立図書館本・西尾市岩瀬文庫本・成田山弘教図書館本・東京大学総合図書館蔵南葵文庫本・「金槐和歌集秀逸」の二本（西尾市岩瀬文庫本・東海大学附属図書館蔵桃園文庫「叫芳亭叢書」所収本）・「金槐和歌集佳調抜」（大分県立図書館「碩田叢史」所収本）であるが、「鎌倉右府家集」と題する伝本は管見に入らない。ただ、岩波文庫『金槐和歌集』の「凡例」に「三輪田高房翁蔵本の鎌倉右府歌集と題した写本（三輪田本」と略記した）を参照したとあり、真淵の評語等を対校している。その校異を見る限りでは、その本は真淵評語本系列の写本である。「家集」「歌集」と一文字の相違はあるが、「鎌倉右府歌集」という書名の真淵評語書入本「金槐和歌集」が伝存したことは間違いない。その「三輪田本」が「抄出」の所拠本文であるかどうかは判らない。この件以外、この称の因つて来たるところは判らない。この書の編者による独自の称であるのかも知れない。あるいは、これは固有名詞として書かれたものではなく、「鎌倉ノ右府ノ家集、金槐和歌集と云フ 上中下三冊」と訓むのかも知れない。それに、右行間に添えられた「抄出」という語も、書名の一部ではなくて、「鎌倉ノ右府ノ家集ノ抄出」という注記であるのかも知れない。今は、確たる根拠のないまま、本文第一行を内題と見て、抜粋本であることとを明確に示す意味もあつて、右行間の書き添えを併せて、「鎌倉右府家集抄出」をこの書の書名とする。

なお、以下の本稿においては、「抄出」という略称を以って呼ぶことにする。

内題の次行に示される「寶暦五年三月 賀茂真淵序辞並評有」というのは、この書の所拠本、あるいは、この

「鎌倉右府家集抄出」という本文形成が行なわれた伝本の所拠本には、宝暦五年三月記の賀茂真淵の序文および真淵の評語があった、という意味である。真淵評語本の多くが、巻頭に真淵の序文を載せているのであるが、それには、前掲のとおり末尾に「宝暦五年三月」と記すものと、「宝暦十年五月」と記すものがある。貞享四年版行本に真淵の評語が書き入れられた伝本の場合、その序文を数葉の別料紙に書写して巻頭に綴り込んでいる。写本の場合は、当然、真淵の序文からを書写している。この書は、その内の「宝暦五年三月」記の序文のある本に拠ったのである。尤も、先にこの書の本文を紹介したように、その真淵の序文も、真淵の評語も、この書においては、全て省略されているのではあるが。

内題に続いて「上中下三冊」とあるところを見ると、この書の所拠本は、貞享四年版行本の可能性が高い。管見に入った『金槐和歌集』の中で、上・中・下の三冊から成るのは、貞享四年版行本『鎌倉右大臣家集』である。そして、その版行本の転写本は、多くは三冊に分割はせず、一冊にまとめることが多い。その一冊が上・中・下の三巻から成るのである。しかし、例えば犬井架蔵写本は上巻（四季）一冊のみの残欠であり、中巻（恋）・下巻（雑）の二冊も写されていたはずである。従って、三冊本の貞享四年版行本写本や真淵評語本写本も伝存したと見るべきである。よって、『抄出』の所拠本を貞享四年版行本の真淵評語書入れ本とは限定せず、その版行本の転写本が所拠本である可能性もあり、真淵評語本系列の写本を含めて、検討することにした。

因みに、賀茂真淵が評語を書き入れたのは、貞享四年版行本を底本にすることであり、貞享四年版行本に真淵の序文を書写して綴じ込み、真淵の評語と真淵の合点を書き入れた本は、静嘉堂文庫蔵の版行本を始めとして、極めて多く伝わっているのである。

『抄出』所載の三十五首の歌は、前節に掲げた各歌の下方に示した柳営亜槐本系統貞享四年版行本の歌番号を一見するだけで明らかなように、全て柳営亜槐本系統に載る。柳営亜槐本系統に載り定家所伝本系統には載らな

い歌が二首（二番・五番）ある。それに、柳営垂槐本系統の諸本と歌順が逆行することはない。それに対して、定家所伝本系統の諸本とは歌順が全く異なるのである。また、この書には部立名はないが、歌の内容から仮に部類したように、春・夏・秋・冬・恋・雜の順に歌が並んでいる。これは、柳営垂槐本系統の部類と一致する。『抄出』は、『金槐和歌集』の貞享四年版行本の類、つまり柳営垂槐本系統の本に載る七一九首の中から、約二十分の一の三十五首の歌を、順に、抄出・抜粹するという、著作性本文形成を経たものと見て間違いない。

要するに、この『抄出』は、『金槐和歌集』の柳営垂槐本系統真淵評語本系列の「宝暦五年三月」記の序文を有する貞享四年版行本あるいはその転写本を所拠本として、賀茂真淵の序文と、歌本文に添えられた真淵の評語と、後述するが真淵が歌頭に付した合点と、歌集の部立名と詞書とを省略し、歌のみを三十五首、抄出・抜粹したものである。『千載館抄書』の編纂時にその抜粹が行なわれたのか、それとも、既に抜粹されていた本文を『千載館抄書』に転写したのか、そのいずれであるかは、今のところ、稿者には判らない。

この『抄出』は、真淵評語本に載る七一九首の歌の中から、どのような基準で歌を抄出・抜粹したのか。確たる根拠は示せないが、別に検討した『金槐和歌集佳調抜』や、『金槐和歌集秀逸』『鎌倉右大臣家集中抜粹』の三種の抜粹系統と同様で、ある抜粹本から更に何らかの基準を以て抄出・抜粹したのか、あるいは、真淵評語本の歌頭に付された○や●の合点が抄出の拠り所であるのか、そのあたりの検討の結果が、手掛かりとはなろう。

先に報告した「抜粹諸系統『金槐和歌集』歌番号対照表」に明らかなように、この『抄出』所載歌は、必ずしも、『秀逸』や『佳調抜』や『抜粹』などの他の抜粹諸系統に載る歌ばかりではない。

八・一二・一五・一七・二〇・二六

の六首は、『秀逸』『佳調抜』『抜粹』の全ての抜粹系統に載る。しかし、

四・五・七・九・一三・一六・一九・二一・二二・二四・二七・二八・二九・三〇・三一・三二・三三・三四

の十八首は、逆に、『秀逸』『佳調抜』『抜粹』には載らず、この『抄出』のみに載る。それに、

一・二・三

の三首は『佳調抜』には載らず、

六・一〇・一八

の三首は『佳調抜』と『抜粹』とは載らず、

一・一四・二三・二五・三五

の五首は『抜粹』に載らない。つまり、この『抄出』は、『秀逸』や『佳調抜』や『抜粹』などの抜粹諸系統から更に歌を抄出・抜粹したものではない、抜粹諸系統とは直接の書承関係はない、ということになる。

また、真淵評語本には、歌頭に、○や●などの真淵の合点の付される歌があるのだが、その真淵評語本において歌頭に付されている合点とこの書の抄出という著作性本文形成との関係の有無について見ると、これも、必ずしもこの合点があることのみが抄出・抜粹の拠りどころではないらしい。先に報告した前掲拙稿「抜粹諸系統『金槐和歌集』歌番号対照表」の「真淵評語合点」の欄をご参照ありたい。

『抄出』に抜粹・抄出された歌は、確かに真淵評語本の殆ど全ての本において合点の付されていることが多い。

一・二・三・四・七・八・一一・一二・一四・一五・一七・一八・二〇・二三・二五・二六・二八・三五

(以上、十八首)

の歌である。しかし、管見の真淵評語本写本・真淵評語書人版行本には全く合点のない歌も、かなりこの『抄出』には抜粹されている。

五・六・九・一〇・一三・一六・一九・二二・二四・二七・二九・三〇・三一・三二・三三(以上、十六首)

といったぐあいである。なお、特定の真淵評語本にのみ合点のある歌が一首ある。

三四（一首）

がそれである。但し、この三四番は柳営垂槐本系統の七一三番であるのだが、もともとは真淵の合点はなかったと見るべきである。というのは、この歌に合点が付されているのは、上田図書館本・岩瀬文庫本・南葵文庫本・大阪市立大学附属図書館蔵森文庫本の四本であるが、上田図書館本は別として、岩瀬文庫本・南葵文庫本・森文庫本の三本の合点は、続く七一四番に付すべきものを誤ったものと見える。七一三番に合点を付す岩瀬文庫本・南葵文庫本・森文庫本三本は、他の全ての本に合点が付されている。続く七一四番の合点を欠いているからである。両首の初句が共に「とにかくに」であるため、この三本は七一四番に付すべき合点を誤って七一三番に付したのである。上田図書館本は、なぜか七一三番と七一四番の双方に合点を付している。おそらく誤謬であろう。このように、この七一三番はもともとは合点のない歌であった。従って、『抄出』には合点のない歌が十七首抄出されていることになる。

要するに、『抄出』所載歌の内の半数は、真淵評語本の真淵の合点がない歌ということになる。『抄出』に抜かれた歌は、真淵評語本の歌頭の合点のみが抄出・抜粋の拠りどころとされたのではない、と言えそうである。

『抄出』は、現在所在が知られる他の抜粋三系統からさらに歌を抄出・抜粋したものではなく、また、真淵評語本の歌頭に付された真淵の合点が抄出・抜粋の際の根拠・基準の一つではあり得ても、それだけを抄出・抜粋の拠りどころにしたのではない、と考えざるを得ないのである。

現在のところ、『抄出』における抄出・抜粋に関しては、この程度のことと判るのみなのである。

（三）

『抄出』に載る三十五首の歌が『金槐和歌集』の柳営垂槐本系統真淵評語本系列の本から歌を抜粋したものであることは、殆んど疑う余地がない。従って、さしあたっての課題は、『抄出』は数多く伝わる柳営垂槐本系統

真淵評語本の版行本や写本の中のどのような本文から抄出されたのか、という問題である。以下、煩雑ではあるが、各歌について、管見に入った『金槐和歌集』諸本の本文と比較しつつ、その件を検討してみる。

『抄出』の本文が柳営垂槐本系統『金槐和歌集』の貞享四年版行本・貞享版行本系列写本・真淵評語本系列写本のいずれの本文とも合致し、表記に差異が見られるのみで、『抄出』がどの本から抄出したとは特定できず、また、どの本からの抄出ではあり得ないと断定できない歌が、幾首もある。

七番「夕されば」の歌。貞享四年版行本の本文は、

夕雁

二二三 夕さればいなばのなびく秋風に空とぶ鴈のこゑもかなしや（定家二二七）

であり、『抄出』はこれと同文である。この歌を載せる谷森本『後葉集』（二七八一）が末句を「こゑもかなしき」とする以外、管見諸本に異文はない。表記に差異があるのみである。

八番「天原」の歌。貞享四年版行本の本文は次のとおりであり、『抄出』はこれと同文である。管見の諸本には表記の差異があるのみで、異文はない。

月前鴈（二二六番詞書）

一二九 天の原ふりさけみればます鏡きよき月よに鴈なきわたる（定家二二七）

九番「浅茅原」の歌。『抄出』の本文は、次に掲げるように、貞享四年版行本の本文と同文である。

荒野月

二七五 浅茅原ぬしなき宿の庭の面にあはれいくよの月はすみけん（定家二二九）

諸写本の内、名古屋市蓬左文庫蔵堀田文庫本を除く定家所伝本系統諸本と、柳営垂槐本系統の伊達文庫（二四八・一三）本・神宮文庫本・彰考館文庫本・高松宮家旧蔵本・篠山鳳鳴高校蔵青山文庫本・宮内庁書陵部本・内閣文庫蔵（二〇一・四五六）本つまり中川文庫本を除く中川文庫本系列とは、末句を「月かすみけん」とする。しか

るに、貞享四年版行本と貞享版行本系列写本と真淵評語本系列写本とは「抄出」との間に異文はない。中には「か」を校合・注記する東海大学附属図書館蔵桃園文庫本・岩瀬文庫本・無窮会図書館蔵平沼文庫本・鹿児島大学附属図書館蔵玉里文庫本・森文庫本等の本があるが、「抄出」はその校合本文とは関わりがない。国文学研究資料館蔵初雁文庫天保十四年写本が末句「月は澄けん」の「け」に「らい」と校合するのは、定家所伝本系統松平文庫本系列の堀田文庫本の「月かすむらん」という本文とどこかでつながるかも知れない。

一〇番「久堅の」の歌。

八月十五夜の心を

二八六 久堅の月のひかりしきよければ秋のなかばを空にしるかな（定家二二二）
が貞享四年版行本の本文である。「抄出」はこれと同文である。諸本も表記の差異があるのみで、異文はない。

一三番「山里は」の歌。貞享四年版行本の本文は、

雪（三六〇番詞書）

三七三 山里は冬こそことにわびしけれ雪ふみわけてとふ人もなし（定家三二六）
である。定家所伝本系統の内閣文庫（二〇一・四五五）本が第二句を「冬とそことに」と誤り、第三句を「わびしければ」と誤る以外、諸本に異文はない。「抄出」は柳営亜槐本系統諸本とも定家所伝本系統とも同文である。

一四番「もの、ふの」の歌。「抄出」の本文は、貞享四年版行本、

歳暮（三九八番詞書）

四〇〇 武士のやそうち川を行水のながれてはやくとしの暮かな（定家三四三）

と同文である。柳営亜槐本系統中川文庫本系列の内閣文庫（二〇一・四五六）本が第二句を「やとかうち川を」と意味不明の本文とし、『秀逸』の桃園文庫本が「八十うち川に」とする以外、管見諸本に異文はない。末句の「かな」に関して真淵評語本系列の岩瀬文庫本が「ぬるホ」と異本校合を掲げ、南葵文庫本・上田図書館本が左行間に「ぬる」と注記するが、「抄出」の本文との関連はないと見てよからう。

二二番「今こむと」の歌。貞享四年版行本の本文は、詞書は長文であり省略に従うが、

六〇六 今来むとたのめし人は見えなくに秋風寒みかりは来にけり（定家四二六）

である。「抄出」はこれと同文である。管見諸写本も、表記に差異があるのみで、異文はない。

二四番「神といひ」の歌は、

心の心をよめる

六五四 神といひ仏といふも世中の人のこゝろのほかのものは（定家六一八）

が貞享四年版行本の本文である。これも、「抄出」は同文である。管見諸写本には、異文はない。

二五番「萬代に」の歌。貞享四年版行本の本文は、「抄出」と同文で、

慶賀の哥（但、六七一番詞書）

六七三 万代に見るともあかじ長月の有明の月のあらんかぎりは（定家三六七）

である。柳営亜槐本系統真淵評語本系列の静嘉堂文庫本が、第二句を「見るともしかし」とし、上の「し」の右に「あ」と注記して「あかじ」という異文を示している外は、諸写本に異文はない。表記の差異のみである。

一七番「旅衣袂かたしき」の歌。貞享四年版行本の本文は、次に掲げるとおりである。

旅の心を（五六四番詞書）

五六七 旅衣袂かたしきこよひもや草の枕にわれひとりねむ（定家五一四）

末句の「われ」を、定家所伝本系統の定家所伝本・函館図書館本・松平文庫本は「わが」とし、同系統の内閣文庫（二〇一・四五五）本・堀田文庫本・彰考館文庫本・群書類従版行本や柳営亜槐本系統の相愛大学附属図書館蔵春曙文庫本・静嘉堂文庫本・彰考館文庫蔵小山田与清写本・筑波大学本・中川文庫本・伊達文庫（二四八・一三）本・青山文庫本・内閣文庫（二〇一・四五六）本・『秀逸』二本は「我」と漢字表記する。他は「われ」と仮名表記する。「抄出」が「われ」とするのは、「われ」と仮名表記する本文に拠ったか、「我」という漢字表記を「われ」と訓んだか、いずれかであろう。「抄出」と柳営亜槐本系統の貞享四年版行本・貞享版行本系列写本・

真淵評語本系列写本とは同文なのである。

二〇番「箱根路を」の歌も、諸本に「我」「われ」「わが」の訓みの差異があるのみである。貞享版行本は、

箱根の山をうち出て見れば、なみのよる小嶋あり、供のものに、此

うらの名はしるやとたづねしかば、伊豆のうみとなん答侍しをき、て

五九三 箱根路をわがこえくれば伊豆の海やおきの小嶋に波のよるみゆ（定家六三九）

という本文である。詞書には諸写本の間で小異があるが、歌の本文は、「抄出」はこれと同文である。第二句の「わが」を「我」と漢字表記する伝本がある（中川文庫本・青山文庫本。定家所伝本系統の内閣文庫本（二〇一・四五五）本・彰考館文庫本・群書類従本。「秀逸」二本）。これは、定家所伝本系統の定家所伝本・函館図書館本・松平文庫本・堀田文庫本が「われ」とすることと関連しよう。柳営亜槐本系統では、管見に入った真淵評語本系列には「我」と漢字表記をする本はない。「抄出」は、「わが」と仮名表記する本に拠ったか、「我」という漢字表記を「わが」と訓んで仮名表記した、と見てよからう。

このように、「抄出」の本文は、柳営亜槐本系統の貞享四年版行本や貞享版行本系列写本や真淵評語本系列写本の本文と合致する。特に貞享四年版行本の本文とは相違することが少ない。しかるに、中川文庫本系列の本文とは小異のある歌が散見する。中川文庫本系列の本文は「抄出」の著作性本文形成とは関わりがないと見てよい。

ところで、柳営亜槐本系統真淵評語本系列の内の東北大学附属図書館蔵狩野文庫本と犬井架蔵本には、共通して「抄出」に対立する異文が散見する。例えば、一番の「今朝見れば」の歌の貞享四年版行本所載の本文は、

正月一日よめる

今朝みれば山も霞て久方のあまの原より春は来にけり（定家 一）

であるが、狩野文庫本と犬井架蔵本のみ末句を「春はきにける」とする。係り結びではないから、誤写あるいは連体形止めということになる。他本は、他系統を含めて、全て貞享四年版行本と同文で、「抄出」も同文である。

二番「木のもとに」の歌の場合も同様である。この歌の貞享四年版行本の本文は、

屏風の絵に旅人あまた花のしたにふせる所 (五九番詞書)

六一 木のもとにやどりをすればかたしきの我衣手にはなはちりつ、(定家五三)

であり、「抄出」も同文である。しかるに、狩野文庫本と犬井架蔵本は末句を「花ぞちりつ、」とする。上田図書館本と「秀逸」の桃園文庫本は「花散りつ、」とし右に「は」と傍記する。他系統を含めて、他の写本に異文はない。狩野文庫本・犬井架蔵本は「抄出」とは本文を異にする。「抄出」の所拠本文ではあり得ないのである。四番「山ちかく」の歌。貞享四年版行本の本文は、

山家時鳥

一四三 山ちかく家ゐしをれば時鳥なく初こゑをわれのみぞきく (定家一二四)

である。「抄出」はこの貞享四年版行本と同文である。しかるに、定家所伝本系統諸本および柳営重槐本系統真淵評語本系列諸写本の中の狩野文庫本・犬井架蔵本二本は、第四句を「鳴初こゑは」(狩野文庫本二拠ル)とする。狩野文庫本・犬井架蔵本二本の本文は「抄出」とは異なるのである。なお、中川文庫本系列の中川文庫本・伊達文庫本(二四八・一三)本・神宮文庫本・彰考館文庫本・高松宮家旧蔵本の五本と定家所伝本系統の定家所伝本・函館図書館本・松平文庫本・群書類従本と谷森本「後葉集」(八六六)は、第二句を「家ゐしせれば」とする。「をれば」として右に「せ」を校合・注記する伝本も、菅文庫本・平沼文庫本・谷森本「後葉集」等がある。この異文は、「を」と「せ(字母「世」)」という類似の文字による誤写・誤読に始まるものであり、意改ではない。ただ、「をれば」「せれば」ともに歌意が成り立つために、双方の本文が固定したのである。

三三番「空蟬の」の歌は、管見の範囲では、狩野文庫本のみ「抄出」と異文がある。貞享四年版行本の本文は、

桜

七〇八 空蟬の世は夢なれや桜花咲ては散りぬあはれいつまで (定家五四九)

である。「抄出」は表記の点に至るまでこれと一致する。しかるに、管見諸写本の内、真淵評語本系列の狩野文

庫本のみ初句を「うつしみの」とする。また、定家所伝本系統の松平文庫本・内閣文庫（二〇一・四五五）本二庫本は第三句を「咲てぞちりぬ」（松平本二掲ル）とする。堀田文庫本は「咲てはちらぬ」と誤る。これ以外の諸本は、表記に差異があるのみで、異文はない。「抄出」は狩野文庫本以外の真淵評語本系列のごとき本文に拠つたと見てよい。なお、稿者架蔵の犬井架蔵本は上巻（四季部）のみの零本であるから、中巻以降の歌の実態は不明であるが、先程来言及しているとおり、狩野文庫本と犬井架蔵本の二本は共通する異文が多く、近い本文であると見てよいから、この歌も、犬井架蔵本は狩野文庫本と同文であつたと思われる。

その狩野文庫本に異文があり、他に東京大学総合図書館蔵文久三年写本・森文庫本にも異文のある歌がある。二三番「世中は」の歌がそれである。貞享四年版行本の本文は、

大乗作中道観哥

六五三 世中はかゝみにうつるかげにあれやあるにもあらずなきにもあらず（定家六一四）

である。「抄出」はこれと同文である。しかるに、狩野文庫本は末句を「なきにしもあらず」とする。東大文久三年本は末句を「なきもあらず」とする。音数不足である。また、森文庫本は第二句を「鏡に移るうつる」と衍があり「うつる」を見せ消子にしている。これら狩野文庫本・東大文久三年本・森文庫本等の本文は「抄出」における抜粋とは関わりないと見てよい。なお、第三句を、中川文庫本系列の青山文庫本が「かげあれや」、「秀逸」の桃園文庫本が「影にあれば」と誤るのも、「抄出」とは関わりない書写性本文変化である。

また、その狩野文庫本と彰考館文庫蔵小山田与清写本に異文があつて、小山田本の本文も「抄出」の抜粋に与つていないことが判る例がある。一八番「旅衣うらがなしかる」の歌がその例である。貞享四年版行本の本文は、

釋中夕露（五七三番詞書）

五七五 旅衣うらがなしかる夕ぐれのすその、の露にあき風ぞふく（定家五一七）

で、「抄出」はこれと同文であり、柳営重槐本系統諸写本も定家所伝本系統諸本も同文である。しかるに、真淵

評語本系列の狩野文庫本は「うちかなしかる」、小山田与清写本は第二句を「うたかなしかる」と誤る。この二本の本文は『抄出』における抜粋に与っていない。なお、玉里文庫本がその「うらがなしかる」の「かる」を「哉」と写した上で、「かる」と見せ消し訂正している。伊達文庫(二四八・一二)本は「うらがなしかる」とするが、玉里文庫本の「哉」と直接の書本関係はあるまい。これは「る(字母「累」)」と「な(字母「奈」)」の類似による誤写と見てよいのであるから。また、桃園文庫本が初句を「からころも」とする。この本文も『抄出』とは関わりがないと見てよい。

小山田本にのみ『抄出』と対立する異文のある歌がある。三〇番「世にふれば」の歌。貞享版行本の本文は、

雑哥中に

六八七 世にふればうきことの集のかすことにたえず涙の露ぞをさける(定家六〇二)

である。『抄出』はこれと同文である。真淵評語本系列の小山田与清写本に第四句「た、すなみたの」という異文があるが、これは、「え」を踊り字と誤ったか、歴史的仮名遣いという「絶えず」とあるべきところを「たへず」と表記した本があつて——管見の本の中に、静嘉堂文庫本と定家所伝本系統の松平文庫本とにその表記が見られる——、その「へ」の連綿が原因で踊り字「ゝ」に誤られたか、いずれかであろう。他本は表記に差異があるのみで、異文はない。小山田与清写本の本文は『抄出』の所拠本文ではあり得ないのである。

また、三三番「かくてのみ」の歌も、小山田与清写本にのみ異文がある。この歌、貞享四年版行本の本文は、
無常を

七一一 かくてのみありてはかなき世中をうしとやいはんあはれとやいはん(定家六〇九)

であり、二度の「ん」と「む」の表記は諸本区々であるが、『抄出』は表記までこれと合致する。諸本の本文の中で、真淵評語本系列の小山田与清写本が第四句を「うとやいはん」と「し」を脱して音数不足になり、『抄出』とは本文が異なる。定家所伝本系統の内閣文庫(二〇一・四五五)本は初句を「か、てのみ」と、「く」を踊り字「ゝ」に誤り、堀田文庫本が「かた、のみ」と、「た」(字母「多」)と踊り字「ゝ」との連綿を誤っている。

他は、表記に差異が見られるのみである。小山田与清写本の本文は『抄出』の所擬本文ではないと考えてよい。

その小山田与清写本と筑波大本とに共通して『抄出』と異なる本文が見られることがある。一二番「もの、ふの」の歌である。その歌の貞享四年版行本の本文は、

載

三四八 もの、ふのやなみつころふこての上に載たばしるなすのしの原（定家本不載。類従「一本」）

である。『抄出』との間で異文はない。真淵評語本系列の小山田本は第二句を「やなみつ、ろふ」と誤り、筑波大本は「やなみつくらふ」とする。他本には異文がない。なお、『佳調抜』が末句の「なす」の右に「濃州」と書き添え、谷森本『後葉集』が末句を「なすのさかりは」とするが、これ等は、『抄出』の本文との関連はない。

このように、彰考館文庫蔵小山田与清写本の本文も、『抄出』の抜粋には関係がないと見てよいのである。

成田山仏教図書館本にも『抄出』と対立する異文がある。一一番「よを寒み」の歌、貞享四年版行本の本文は、

月前擣衣（二八七番詞書）

二八九 夜を寒みね覚て聞ば長月の有明の月に衣うつなり（定家二四七）

である。『抄出』はこれと同文である。定家所伝本系統の定家所伝本系列と松平文庫本系列とは初句を「よをながみ」とするが、柳営亜槐本系統の管見に入った全伝本およびこの歌を入集させている『風雅集』（六七二）の本文は『抄出』と同文で、「夜を寒み」（校訂）である。つまり、殆んどの本が『抄出』と同文なのである。しかるに、真淵評語本系列の成田山本のみ、第二句を「ね覚に聞ば」とするのである。この成田山本の本文も、『抄出』における抄出・抜粋には関与していないと見てよからう。

二八番「おもひ出て」の歌。貞享四年版行本の本文は——詞書は長文に及ぶために省略する——、
六八三 思ひ出てよるはすがらにねをぞなく有しむかしの世々のふること（定家五九六）

である。「抄出」が第三句を「ねをなく」とし、「を」の下方に「ぞ」を入れるべく、右行間に「そ」と書き添えているのは、校合であるのか勘物であるのかは判然としないが、妥当である。これで「抄出」は貞享四年版行本と同文になるのである。全ての伝本が「音をぞ泣く」(校訂)とするのである。ただ、この歌、真淵評語本系列の成田山本は下句を空白としている。成田山本は「抄出」の所拠本文ではあり得ないのである。なお、中川文庫本系列の彰考館文庫本は、第四句を「あかしむかしの」と、「り」が「可」の草体と類似することが原因の誤謬本文を有し、この本の本文も、「抄出」の所拠本文ではあり得ない。他は、表記の差異が見られるのみである。小山田与清写本の本文は柳営曲槐本系統の中で静嘉堂文庫本の本文と近いのであるが、その静嘉堂文庫本にも「抄出」と対立する異文が見られる。六番「天河」の歌がそれである。この歌、貞享四年版行本の本文は、

秋のはじめによめる

一九二 天の川みなわさかまきゆく水のはやくも秋のたちにけるかな (定家一六四)

であり、「抄出」はこれと同文である。真淵評語本系列では、静嘉堂文庫本が第二句を「みなとさかまき」と誤る。他本には異文はない。他の系列等では、中川文庫本が「みなわけかまき」、神宮文庫本が「みなわけるまき」として「せる」を見せ消チにして「さか」と訂正し、彰考館文庫本が「みな連せきまき」として「連」以下を見せ消チとする。また、定家所伝本系統の群書類従架蔵写本は第四句を「はやくも秋は」とする。いずれの本文も、「抄出」における抜粹との関連はないと見てよい。

五番「さみだれの」の歌。貞享四年版行本の本文は、

郭公 (一四九番詞書)

一五三 五月の露もまだひぬ奥山のまきの葉がくれ鳴郭公 (定家一三六)

である。初句「五月の」は「さつきの」と読むのが普通であるうが、それでは音数不足である。秋田県立図書館本・伊達文庫(二四八・一二)本・菅文庫本・平沼文庫本・南葵文庫本・上田図書館本・初雁文庫天保十四年写本の諸写本もこの貞享四年版行本と同文である。他伝本は、全て「五月雨の」(校訂)である。「抄出」も初句を

「さみだれの」とする。貞享版行本系列諸本と真淵評語本系列諸本の多くは貞享四年版行本の本文を「さみだれの」の本文に修正している訳である。なお、この歌、真淵評語本系列の上田図書館本が第四句を「まきのかへれ」と誤り、森文庫本が第三句を「奥山に」とする。他系列では、中川文庫本系列の内閣文庫（二〇一・四五六）本が第二句を「露もまだいぬ」、第四句を「慎のてがくれ」と誤る。これ以外には、諸写本に『抄出』と対立する異文はない。真淵評語本系列の上田図書館本・森文庫本二本と中川文庫本系列の内閣文庫（二〇一・四五六）本の本文は、『抄出』の抜粋には与つていないことになる。

岩瀬文庫本の本文も『抄出』の抜粋に与つていない。一六番「ほと、ぎす」の歌は、貞享四年版行本は、

寄雨恋

五二八 時鳥なくや五月のさ月あめのはれずものおもふころにも有かな（定家三九八）

という本文である。『抄出』では「さみだれの」とある第三句を貞享四年版行本のごとく「さ月あめ」とする本が、貞享四年版行本・秋田県立図書館本・伊達文庫（二四八・一二）本・春曙文庫本・秋月郷土館本・菅文庫本・岩瀬文庫本・平沼文庫本・静嘉堂文庫本・小山田与清写本・上田図書館本・初雁文庫天保十四年写本・伊達文庫（二四八・一三）本・彰考館文庫本など、かなりある。菅文庫本には朱で「さみだれ」と傍書があり、平沼文庫本には「みたれ」と校合がある。ちなみに、定家所伝本系統諸本は全て「五月雨」「さみだれ」とする。『抄出』は、「五月雨」「さみだれ」とあった本に拠るのか、貞享四年版行本のごとく「さ月あめ」とあった本文を「さみだれ」と読んだのか、判然としない。なお、成田山本・玉里文庫本二本は「さほあめ」と誤る。また、真淵評語本系列の岩瀬文庫本のみ、末句を「ころも有かな」とする。共に独自本文であり、『抄出』における抜粋には関わっていないと見てよい。

三四番「とにかくにあれば有ける」の歌。貞享四年版行本の本文は、

わび人の世にたちめぐるを見て

七二三 とにかくにあれば有ける世にしあればなしとてもなき世をもふるかも（定家六一一）

である。「抄出」は表記の点までこれと合致する。尤も、諸写本には表記に差異があり、異文もある。真淵評語本系列の森文庫本は第二句を「哀は有りける」とし「ける」は「けり」の「り」を見せ消子として右に「る」と訂正、東大文久三年写本・上田図書館本・初雁文庫天保四年写本三本が末句を「世をもふる哉」とし、そのうちの東大文久三年写本は「哉」の右に「かも」と注を付す。平沼文庫本は第二句を「あれば有けり」とする。

……定家所伝本系統の堀田文庫本も……。これだけが異文であり、他本は表記の差のみである。真淵評語本系列の東大文久三年写本・平沼文庫本・上田図書館本・初雁文庫天保四年写本・森文庫本の本文は「抄出」の所掲本文ではあり得ない。また、南葵文庫本・上田図書館本・初雁文庫天保四年写本の三本は、第二句の「あれば」の右に「あはれ」と校合・注記を付している。中川文庫本系列の神宮文庫本・青山文庫本・内閣文庫（二〇一・四五六）本三本が第四句を「なしとてなき」とするのは、「抄出」と関わらないと見てよい。なお、定家所伝本系統の彰考館文庫本が第二句を「哀ありける」として「あはれ」と注記するのは、先の南葵文庫本・上田図書館本・初雁文庫天保四年写本三本とは正反対の本文と注記である。群書類従版行本と犬井架蔵写本とが「哀有ける」とするのも、校合・注記はないが、南葵文庫本・上田図書館本・初雁文庫天保四年写本三本と同じ歌本文である。

どの本が「抄出」の抄出・抜粋に与った、あるいは、与らなかつたと、特定できるわけではないが、「抄出」の抄出・抜粋の在りようを伺わせる本文異同の例が幾つかある。

一九番「秋もはや」の歌。貞享四年版行本の本文は、

霧中鹿（五七六番詞書）

五七七 秋もはやすゑの野に鳴鹿の聲きくときぞ旅はかなしき（定家五一九）

であり、第二句は音数不足である。秋田県立図書館本・伊達文庫（二四八・一二）本・春曙文庫本・秋月郷土館本・桃園文庫本・菅文庫本・岩瀬文庫本・平沼文庫本・上田図書館本がこれと同文である。このうち、菅文庫本は右に「本ノマ、」と注記する。音数不足であるからであろう。「抄出」はこの第二句を「末野の原に」とする

のである。東大文久三年写本・静嘉堂文庫本・小山田与清写本・狩野文庫本・南葵文庫本は同文であるが、表記を「すゑの、原に」と異にし、成田山本・筑波大本・初雁文庫天保四年写本・森文庫本も「すゑ野の原に」と表記を異にする。共に「抄出」と同文である。定家所伝本系統の内閣文庫本・群書類従版行本・同犬井架蔵写本も「末野の原に」とする。堀田文庫本は「堀野、原に」という独自本文である。しかるに、定家所伝本系統の定家所伝本や函館図書館本・彰考館文庫本・松平文庫本、それに、柳営垂槐本系統の中では比較的定家所伝本系統の本文に近い中川文庫本系列諸本は「すゑのはらのに」とする。こう見ると、『抄出』は、柳営垂槐本系統真淵評語本系列の成田山本・筑波大本・初雁文庫天保四年写本・森文庫本のごとく「末野の原に」とする本文に拠ったと考えることもできる。但し、ここは、もともとは定家所伝本系統定家所伝本系列の「末の原野に」(校訂)という本文で、松平文庫本系列の内閣文庫本や群書類従本系列へ、また、柳営垂槐本系統の中川文庫本系列へ、継承され、次いで、「末野の原に」へと本文変化が生じ、それが、貞享四年版行本のごとき「すゑの野に」という音数不足の本文へ誤られ、また、その誤謬が修正された、という本文の流伝があったと見るべきである。

『抄出』は、その貞享四年版行本に向けての本文修正が行なわれた真淵評語本系列の本に拠ったか、定家所伝本系統の群書類従本系列等に拠って修正された本文を抜粋したか、いずれかであると考えるのが妥当であろう。

二一番「こむとしも」の歌の場合も、いまの例と同様で、『抄出』は、修正した本文に拠るか、あるいは、不備を知って修正して抄出し、本来の本文を備えることになった、と見てよい。貞享四年版行本の本文は、次のとおりである——詞書は、長文に及ぶため、省略に従う——。

六〇五 こむ年もたのめぬうはの空にだに秋風ふけば鴈は来にけり (定家四二五)

である。上句は、来ようと約束もしない上空にさえ、の意である。貞享四年版行本の「こむ年も」は、「とし」
「も」の「とし」に「年」を当てたのである。この表記では誤解を招く。「来む年も」の掛け詞と見たにしても、
それでは末句の「鴈は来にけり」の完了詠嘆と齟齬する。この貞享四年版行本と同じ表記をする伝本が他にも多
い(貞享版行本系列の秋田県立図書館本・伊達文庫本(二四八・一二)・春曙文庫本。真淵評語本系列の秋月郷

土館本・菅文庫本・岩瀬文庫本・成田山本・東大文久三年写本・平沼文庫本・南葵文庫本・上田図書館本・玉里文庫本。中川文庫本系列の青山文庫本。このうち、真淵評語本系列の菅文庫本・平沼文庫本は「年」の右に「とし」と注記する。「年」という誤解を招く当て字をする貞享四年版行本の表記に、「とし」を是とする認識によつて注記がなされ、「来むとし」と仮名表記に正す本や「とし」と注記する本が出現したのである。さような本文が「抄出」の抜粹に与つた、あるいは、「とし」と注記がある本に拠つて修正しつつ「抄出」は抜粹した、あるいは、「抄出」の抜粹者が「年」の表記の不適切なことに気付いて「こむとし」と修正した、そのいずれかであろう。いずれにせよ、「抄出」は貞享四年版行本等の誤つた本文のまま抜粹したのではないのである。

二六番「山はさけ」の歌。貞享四年版行本の本文は、

大上天皇御書下預時歌（六七九番詞書）

六八〇 山はさけ海はあせん世なりとも君にふた心わがあらめやも（定家六六三）

である。末句「わがあらめやも」を、「抄出」は「我あらめやも」とする。「わが」とも「われ」とも訓める漢字表記であるが、真淵評語本系列では静嘉堂文庫本・小山田与清写本・筑波大本が「我」と表記し、他は「わか」と仮名表記する。但し、森文庫本のみ、「われ」として右に「カイ」と校合を掲げている。他の写本では、定家所伝本系統群書類従本系列の二本と中川文庫本系列の中川文庫本・青山文庫本、「秀逸」の桃園文庫本、これ等が「我」と漢字表記する。「抄出」は、真淵評語本系列で「我」と表記する本文に拠つたか、群書類従版行本を参照したか、抜粹・書写した人物の考えて漢字表記にしたか、いずれかであろう。

二七番「ひむがしの」の歌。これにも、同様に、「我」「われ」「わが」の表記と異文の問題がある。貞享四年版行本の本文は、詞書は長文に及ぶために省略に従うとして、

六八一 ひむがしの国にわがおれば朝日さすはこやの山のかげとなりきに（定家六六二）

である。第二句「国にわがおれば」の「わが」は、「抄出」をはじめ、多くの本が「わか」とするが、それを、真淵評語本系列の静嘉堂文庫本・小山田与清写本二本は「我」とし、初雁文庫天保十四年写本は「吾」とし、狩

野文庫本・筑波大本二本は「われ」とする。他に、定家所伝本系統の群書類従版行本は「我」、同犬井架蔵写本は「われ」、柳営重槐本系統の春曙文庫本・中川文庫本・青山文庫本三本は「我」とする。「わが」とする『抄出』は、真淵評語本系列で「われ」とする狩野文庫本・筑波大本のごとき伝本以外の本文に拠ったか、抄出・書写した人物の考えで「わが」としたか、いずれかであろう。

二九番「中々に」の歌。貞享四年版行本の本文は、詞書は二八番と同文で、長文に及ぶために省略するとして、

イてなとか

六八四 中／＼においはほれてもわすれなくなにとむかしをいとしのぶらん（定家五九七）

である。第三・四句に「イてなとか」という異本校合がある。『抄出』は「わすれなでなにと」とする。この箇所、諸伝本に本文の差異や種々の異本校合が見られる。貞享四年版行本と全く同じ本文で「イてなとか」を一続きの校合とするのは、伊達文庫（二四八・一二）本・秋月郷土館本・菅文庫本・東大文久三年写本・南葵文庫本・初雁文庫天保十四年写本・玉里文庫本の諸写本である。これは、定家所伝本系統の「わすれなでなとか」という本文を校合したものであると見てよい。桃園文庫本・岩瀬文庫本・平沼文庫本は「で」の校合と「なとか」の校合を離し、別個の異文注記とする。これ等の校合を本文に取り込んで写すと『抄出』の本文になる。秋田県立図書館本は、「わすれなくなにとむかしを」を本文とし「く」の右に「イて」と校合を示す。この異文注記を取り込んでも、『抄出』の本文になる。そのように、異文注記を本文に取り込んだのか、転写の間に本文変化が生じたのか、判然としないが、第三・四句を「忘れなでなにと昔を」（校訂）とする本があるのである。中川文庫本・高松宮家旧蔵本・書陵部本の諸本である。初雁文庫天保四年写本は、「わすれなでなにと」とし「にと」の右に「イとか」と校合があるが、本行の歌本文は、中川文庫本・高松宮家旧蔵本・書陵部本の諸本や「抄出」と同じである。中川文庫本・高松宮家旧蔵本・書陵部本の諸本は中川文庫本系列であり、前述のとおり「抄出」における抜粹には関与していないと見てよいが、初雁文庫天保四年写本という真淵評語本系列の本に「抄出」と同じ歌本文が見られることは、注目される。この歌は、真淵評語本系列の初雁文庫天保四年写本のごとき本文か

ら抄出が行なわれた、ということになるのであるから。勿論、初雁文庫天保四年写本そのものが「抄出」の抜粋に与った所拠本である、とまでは言えない。先に検討したように、三四番「とにかくにあれば有ける」の例が、初雁文庫天保四年写本と「抄出」の間で異文があるわけであるから。

三五番「とにかくにあなさだめなき」の歌。「抄出」の本文は、貞享四年版行本の本文と同文で、

人心不常といふ事を

七一四 とにかくにあなさだめなき世中やよろこぶものあればわぶるもの有り（定家六二〇）

である。真淵評語本系列の森文庫本が第二句を「あなさだめなの」とするが、貞享版行本系列・真淵評語本系列の諸写本は全て「あなさだめなき」とする。定家所伝本系統は、群書類従大井架蔵写本を除く全ての本が「あなさだめなの」とする。森文庫本が群書類従本によつて本文を校訂するところがあることは、既に指摘したところであり、ここで森文庫本が第二句を「あなさだめなの」とするのも、同じく群書類従に拠る校訂であろう。中川文庫本系列のうちの神宮文庫本・高松宮家旧蔵本・書陵部本・内閣文庫（二〇一・四五五）本も「あなさだめなの」とする。中川文庫本が「あなさだめなれ」とするのは、字母「能」の「の」が「れ」に誤られたものと見てよく、この本も、もとは「あなさだめなの」であつたと考えられる。「抄出」は、柳営垂槐本系統の貞享四年版行本・貞享版行本系列もしくは真淵評語本系列の本文と合致するのである。これと伝本を特定はできないが、

「抄出」に独自本文があることも、注意しておく必要がある。三番「山風の」の歌がそれである。この歌、貞享四年版行本の本文は、

山中にさくらのさきたる所

七六 山風のさくらふきまく音すなりよしの、瀧のいわもとゝろに（定家七二）

であり、「抄出」は第四句を「よしの、山の」とする。柳営垂槐本系統も定家所伝本系統も、秀逸本系統・抜粋本系統の抜粋諸系統も、この歌を載せる「万代集」¹⁴（二八〇九番）も、全て「吉野の瀧の」であり、ここは「抄

出』の独自本文である。「抄出」の所拠本に「吉野の山のとあつて、さような本文の真淵評語本が管見に入らないだけのことであるのかも知れないが、「吉野の山の岩もとどろに」(校訂)は、あり得ない字句表現である。「滝のとあつてこそ」とどろに」と応じるのであるから。「抄出」そのものの段階で、不注意のため、あるいは慣れで、「吉野の山のと書いたと考えてよい。なお、真淵評語本系列の筑波大本は、第二句が「桜まく」と音数足らずであり、中川文庫本系列の高松宮家旧蔵本・内閣文庫(二〇一・四五五)本が「桜吹まて」、青山文庫本が「さくらふきまし」と誤る。これらの本文は「抄出」とは関わらない。「万代集」の初句「はるかぜの」という本文も、同様に、「抄出」とは関係がない。

一五番「恨わび」の歌。貞享四年版行本の本文は、

寄月待人 (五一九番詞書)

五二〇 恨わびまたじとおもふゆふべだになを山のはに月は出にけり(定家、不載。類従「一本」六九七)である。「月は出にけり」という末句を、「抄出」は「月は出にけり」とする。柳営帯槐本系統諸写本・定家所伝本系統類従本系列諸本の殆んどが「月は出にけり」である。伊達文庫(二四八・一一二)本のみは「月は出にけり」とする——この本が「出」を「いで」と読むか「で」と読むかは判らない——。尤も、「秀逸」の岩瀬文庫本は「月は出にけり」とする。これでは音数不足である。「抄出」は、管見諸本の中では、伊達文庫(二四八・一一二)本とのみ本文が合致する。両者に書承関係があったというより、たまたま両本が個々別々に「に」を脱したのであって、「抄出」の独自本文と見ることもできよう。

その「抄出」の独自本文の中には、「抄出」の誤謬と見做してよいものがある。三番「年ふりは」の歌の初句がそれである。その歌の貞享四年版行本の本文は、次のとおりである。

屏風哥

六九二 年ふれば老ぞたうれて朽ぬべき身は住江の松ならなくに(定家五八八)

「抄出」は初句を「年ふりは」とするが、これでは歌意不明である。定家所伝本系統を含めて、諸写本の「年経

れば」(校訂)の本文が妥当である。なお、真淵評語本系列の秋月郷土館本が第三句を「おしぬべき」と誤り、静嘉堂文庫本が第四句を「身は住よしの」とし右に「の江」と注記し、小山田与清写本が第四句を「身住の江の」と「は」を脱し、森文庫本が第二句を「老にたわれて」とする。これらの本文は『抄出』の本文と関わりがない。他は、表記に差異が見られるのみである。この歌の場合、『抄出』が初句に誤謬を犯した、あるいは誤謬を犯した本文を転写した、ということになる。

以上、煩雑にわたったが、『抄出』所載の三十五首全てについて、検討を加えてみた。粗々を整理しておく。『抄出』所収本文は、『金槐和歌集』諸系統の中の柳営垂槐本系統の本文を備えているが、その中でも、貞享四年版行本・貞享版行本系列・真淵評語本系列の本文に近く、特に貞享四年版行本の本文に近い。三十五首中の二十五首が貞享四年版行本と一致する。行間書入れ補入の例を含めると、更に一首増える。また、貞享四年版行本の明らかな誤謬や不備を修正した形の本文が五首もある。直接修正したかどうかは判らないが、これは『抄出』の所収本文の源流が貞享四年版行本あるいはその忠実な転写本であることを示す事実である。

一方、同じ柳営垂槐本系統の中川文庫本系列の本文とはいささか異なる。また、真淵評語本系列の中では、岩瀬文庫本・狩野文庫本・犬井架蔵本・成田山本・東大文久三年写本・静嘉堂文庫本・小山田与清写本・上田図書館本・筑波大本・森文庫本の諸写本は『抄出』と本文が相違することが多く、その本文は『抄出』における抄出・抜粹に關与していないと見てよい。他本にも異文が散見し、どの本が『抄出』の抜粹に与ったかは特定できない。尤も、貞享四年版行本の本文が最も『抄出』の本文に近い、とは言える。なお、『抄出』の独自本文も散見する。その中には、誤謬と考えざるを得ない本文も四例ある。また「わが」「我」の訓みの不明な表記の違いが二例ある。『抄出』と貞享四年版行本の本文の差異は、表記の違いも大きくなく、以上の程度に過ぎないのである。

『金槐和歌集』の真淵評語本の全ての伝本を調査したわけではなく、また、数多く伝わる真淵評語書き入れのある貞享四年版行本を検討していないため、以上は、管見の写本に限ってということになるが、おおむね、以上

のごとき傾向は見て取れるのである。

△ 四 △

『鎌倉右府家集抄出』の本文について検討した本稿を整理しておく。

学習院大学図書館蔵『千載館抄書』所収『鎌倉右府家集抄出』は、『金槐和歌集』柳営重槐本系統の貞享四年版行本もしくは真淵評語本系列の一本、『宝暦五年三月』記の真淵の序文を有する本から、三十五首の歌を抜粋するという、著作性本文形成が行なわれたものである。

他の抜粋系諸系統、『金槐和歌集秀逸』『金槐和歌集佳調抜』『鎌倉右大臣家集中抜粋』は、この書と直接の書承関係はない。この書にのみ抜粋されて載る実朝歌があり、また、他の抜粋諸系統には載るにもかかわらずこの『抄出』には載らない歌がある、という事実があり、さように判断できるのである。

また、真淵評語本の本文から歌が抜粋された基準は判然としない。真淵評語本の歌の中で歌頭に真淵の合点の付された歌が多く抜粋されているが、『抄出』所載歌の半数はその合点のない歌なのである。真淵の合点が抜粋の基準ではないらしい。『抄出』という著作性本文形成を行った人物の好みが反映していると見る他ない。

抄出された歌を真淵評語本系列諸本の本文と比較検討してみると、管見諸本の中では、これと所拠本文を特定することはできない。ただ、真淵評語本系列は諸写本の間で本文に小異があり、それに拠って、『抄出』には関与していないと見てよい伝本が指摘できた。岩瀬文庫本・狩野文庫本・犬井架蔵本・成田山本・東大文久三年写本・静嘉堂文庫本・彰考館文庫蔵小山田与清写本・上田図書館本・筑波大本・森文庫本等は、特に『抄出』に載る歌の本文との間で異文が多い。これらの本の本文は『抄出』の所拠本文とは考えにくい。他の伝本も、異文が散見する。諸写本の中で、この本が『抄出』の抜粋に関与した、と特定できる本は、管見の限りではない。た

だ、最も「抄出」と、本文に差異が少ないのは貞享四年版行本の本文である、とは言える。真淵の評語等が書入れられた貞享四年版行本が「抄出」の本文形成に関わった、ということは十分あり得よう。

なお、この「抄出」には独自本文があり、その独自本文の中には、「抄出」の誤謬と判断せざるを得ないものもある。「千載館抄書」収録時の誤謬であるのか、それ以前の、「抄出」の本文形成時もしくは転写の間の誤謬であるのかは、判然としないが。

学習院大学図書館蔵「千載館抄書」所収「鎌倉右府家集抄出」は、柳営垂槐本系統「金槐和歌集」貞享四年版行本もしくは真淵評語本系列の写本を所拠本として、三十五首の歌を抄出・抜粹するという著作性本文形成を行なったわけであるが、一首一首の歌について見ると、時には独自の意改を行ない、時には誤謬を犯す、という書写性本文変化も生じているのである。抄出・抜粹という著作性本文形成と意改・誤謬という独自の書写性本文変化とが、同時平行的に行なわれたのか、それとも、抄出という著作性本文形成が行われた後、転写の間に誤謬等の書写性本文変化が生じて、現在見るかたちになったのか、そのあたりのことは、十分には判らない。

いつ頃この抄出が行なわれたのか、「金槐和歌集」の本文との関連の検討だけでは、判然としない。また、この抄出を行なった人物も、稿者にはまだ検討できていない。「千載館抄書」全巻の調査検討に俟つほかない。

「鎌倉右府家集抄出」の紹介とその本文の吟味とに終始した本稿ではあるが、目指すところは、真淵評語本「金槐和歌集」からの抜粹諸系統の本文に関する本文調査と、その抜粹諸系統の本文流伝の総合調査の一端としての本稿である。これはこれで、無意味な検討でもあるまい。

注1、「国書総目録」第二卷（昭和三十九年八月刊）の「金槐和歌集」の項。

2、「国書総目録」第四卷（昭和四一年八月刊）の「抄書」の項。

3、「著作性本文形成」「書写性本文変化」の語の定義については、拙稿「平家物語」の成立基盤——その書承的側面

——「〔平家物語の成立 あなたが読む平家物語Ⅰ〕平成五年十一月）を（参照ありたい。

4、『金槐和歌集』の伝本分類に関する私見は、「『金槐和歌集』貞享本系統本文考 所載歌と歌順の吟味 一（筑波大学平家部会論集）第五集・平成七年十一月）・『金槐和歌集』定家本系統本文考 四系統分類と定家本系統の

系列分類——」（筑波大学平家部会論集）第六集・平成九年六月）及びそれらを整理した口頭発表「『金槐和歌集』

の伝本分類」（筑波大学日本文学会例会・平成十年十一月七日・筑波大学）に於いて提示した。

5、それぞれの歌番号および本文は、「私家集大成 中世Ⅰ」（昭和四十九年七月）所収の「37実朝Ⅰ 金槐和歌集（定家所伝本複製）及び「38実朝Ⅱ 金槐和歌集（貞享四年版本）」（担当、久保田淳氏・浜口博章氏）に拠る。

6、岩波文庫「金槐和歌集」初版（昭和四年四月）以後の「改版」にも、初版の「凡例」が掲げられている。

7、拙稿「大分県立図書館蔵「碩田義史」所収「金槐和歌集佳調抜」の本文について」（筑波大学平家部会論集）第八集・平成十二年十二月）

8、拙稿「抜粋諸系統「金槐和歌集」歌番号対照表——柳営亜槐本系統賀茂真淵評語本との比較——」（筑波大学平家部会論集）第七集・平成十一年三月）

9、谷森本「後集集」は、「圖書寮叢刊 後集和歌集」（昭和五一年二月刊）に拠る。

10、「一本」は、群書類従本「金槐和歌集」の末尾に追加された「一本及印本所載歌」を示す。

11、「風雅集」は、『新編国歌大観 第一巻 勅撰集編 歌集』所収（底本、九州大学附属図書館蔵細川文庫本）に拠る。

12、中川文庫本の系列の本文が柳営亜槐本系統の中では比較的定家所伝本系統に近いという件は、拙稿「『金槐和歌集』貞享本系統本文考——所載歌と歌順の吟味——」（筑波大学平家部会論集）第五集・平成七年十一月）等において指摘した。但し、その稿の執筆当時は、この系列を、「貞享本系統の伊達文庫本等のグループ」「写本系列」と呼んでいた。

13、森文庫本が群書類従に拠って本文を改訂している件は、拙稿「谷森本「後集和歌集」所載実朝歌の本文吟味から——貞享四年版本系統「金槐和歌集」の本文流伝の問題へ——」（『文芸言語研究 文芸編』二八・平成七年九月）等において指摘した。

14、「万代集」の本文は、『新編国歌大観 第二巻 私撰集編 歌集』（底本、竜門文庫本）に拠る。

〈付言〉

ご収蔵書の閲覧と複写配布をご許可くださった学習院大学図書館に、心より御礼申し上げます。